



峰 万里恵 ホームページ
<http://mariemine.web.fc2.com/>

2011. 4. 16

☆スペイン・ハヴル *Olé*

わたしの道のバラの花たち

As rosas do meu caminho

峰 万里恵 (うた)

高場 将美 (ギター)

《I》

1. このおかしな人生 *Estranha forma de vida*

作詞：アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues*

作曲：アルフレード・マルスナイロ *Alfredo Marceneiro* “*Fado bailado*”

◆ファドの伝統的な作りかたでは、歌詞が先で、メロディは既存のものを流用します。この曲は、ファドの枠を超えた、ポルトガル（たぶん世界でも）最高の女性歌手アマーリアさんが、若いころにつくったもので、自作の歌詞に、先輩で、ファド男性歌手の最高峰であるマルスナイロ作のメロディ『ファド・バイラード』を当てはめました。そのさい、より率直に、力強く直しています。

神様の意思だった——わたしが、このように思いまどいながら生きているのは。そして、すべての「アイ！」はわたしのもの、わたしのサウダードも。——神様の意思だった。

なんという変わった生きかたを、このわたしの心はもっているのだろう。なくしてしまった命で生きている、だれか運命を変える魔法の杖をあげればいいのに——なんという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの

命令をきかない心。おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かたくなに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていけない。止まれ、鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らないくせに、なぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたしはもう、おまえといっしょには行かない。

* サウダード *saudade* は、失ったものや人、ここにはないものや人を、懐かしく思い出す、悲しい愛の気持ちです。

2. 花咲くオレンジの木 *Naranjo en flor*

作詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito*

作曲：ビルヒーリオ・エスポーシト *Virgilio Expósito*

◆1940年代に、アルゼンチンのタンゴの歌詞に革命を起こした詩人と、その弟（ピアノを弾いていた）の合作です。彼らの父親は孤児院出身でアナキスト、ブエノスアイレス州の町で、お菓子が自慢の喫茶店（ライブもあった）を開くかわら、文字関係の専門職（速記・タイプなど）フリーターをしていました。

水よりもやわらかかった……やわらかい水よりも……川よりもみずみずしかった 花ざかりのオレンジの木。

そして その夏の通り——失われた通りに 命のひとかけらを残した。そして去って行った。

あの人に わたしの手は何をしたのだろう？ 何をしてしまったのだろう？……わたしの胸のなかに これほどの痛みをのこすほどの何を？…… 老いた木立ちの痛み、街角の歌。命のひとかけらとともに……花ざかりのオレンジの木……

最初に 人は悩むことを知らなくてはいけない。それから愛すること、その次に発ってゆくこと。そして最後は 考えもなく歩くこと……

花ざかりのオレンジの薫り、ひとつの愛の むなししい いくつかの約束——それらは風のなかに逃げていった……

その後……その後になんの意味がある？……わたしの全人生は「きのう」だ。それが わたしを過去に足止めする。永遠につづく 老いた青春。それがわたしを なにもできない弱者にしてしまった 光をなくした小鳥のように……

3. あっちのほうのサンビータ *Zambita de allá*

作詞作曲：フーリオ・アルヘンティエーノ・ヘレーズ *Julio Argentino Jerez*

◆作者はアルゼンチン北西部サンティアゴ州出身の歌手でギタリスト。民俗芸能グループに参加して1920年代に首都ブエノスアイレスに出てきて住み着き、故郷に根ざした音楽をずっと守り、作りつづけ、広く愛される存在でした。彼の作詞作曲したチャカレーラ『アニョランサス（追憶）』は、サンティアゴ州憲法により、この州の文化の結晶した州歌に制定されています。

サンティアゴ人の歌といえば それはビダーラ、それはビダーラ。そしてチャカレーラとサンバ。なんと上手に踊ること！

ボンボにとびついたら もう手を離さない。棒と革を叩いて自分を伴奏する。適当なところで叫ぶ——ウイハ ハハーイ！

サンティアゴ人が死んだら、だれも彼を泣かない、ひとびとは彼にビダーラをひとつうたう。彼は天国へ行ってしまう。

教会の鐘も鳴らない。ウイニャップも花を咲かせない。ただ村のボンボだけが 彼を泣いているようだ。

サンバとガトとチャカレーラ——踊る若い娘たち。アローハ酒の壺がたくさん——わたしは保証するけれど——決して足りなくなることはない。そしてサンティアゴの心がひとつ——わたしは保証するけれど——決して足りなくなることはない。

* ボンボ *wiñaj* は、大型の太鼓。
* ウイニャップ *wiñaj* は、雨が降る前になると黄色い花を咲かせる（雨がやむと花は消えてしまう）灌木です。天災や不幸を花で予言するともいわれます。
* アローハ *aloja* 酒はトウモロコシやアルガローボ（イナゴ豆）の実を煮て、臼（うす）でついてすりつぶして発酵させたものです。

4. わが過ち *Erros meus*

詩：ルイシュ・ド・カモンエンシュ *Luís de Camões*

作曲：アラン・ウルマン *Alain Oulman*

◆カモンエンシュ（発音が少しややこしいので、外国ではカモンエスとか呼んでいますが）は、16世紀の人で、大航海時代のポルトガル人の偉業をギリシア神話のように表現した叙事詩『ウズ・ルジーアダシュ *Os Lusíadas*』で有名です。ここでうたわれる詩は彼の死後、1616年出版とのこと。作曲したウルマンは現代の人で、フランス人両親の元に、リスボン郊外で生まれ育ち、ファドの音楽に新しい次元をひらいた音楽家です（演奏活動はしなかったが、ピアノを弾いた）。

わたしの過ちの数々、悪い運命、燃える愛が わたしの破滅の中で共謀していた。

過ちたちと運命は余計なものだった。わたしの破滅には 愛だけでじゅうぶんだった。

わたしはすべてを通り過ぎてきた。でも 今でも目の前にありつづけるのは 過ぎたことどもの大きな痛み。

そこで 悩む怒りたちが わたしに教えた——もう決して 心満ち足りた人間になろうとしないことを。

わたしは わたしのすべての歳月を過ごすあいだ まちがいつづけてきた。運命の女神がわたしを罰する理由を与えてしまった。わたしのあてのない希望を罰するように。

5. 貧しい人たちのサンビータ *Zambita de los pobres*

作詞作曲：アタウワルパ・ユパンキ *Atahualpa Yupanqui*

◆作者は、ギタリスト・歌手・作家でもあり、母国アルゼンチンのみならず南アメリカ大陸の民衆伝統の最高の表現者と評価されています。この曲は、若いころつくったもので、彼（生まれはパンパ草原地方）が長く住んだトゥクマン州の高原の村が背景になっています。

日曜日があると 村までわたしは下りてゆく。すると取り残されたわたしの小屋は まるで言っているようだ、「なんてひとりぼっちのわたし！」

アルガローボの木の下で サンビータがひとつ うたっているのがわたしには聞こえる。そしてギターのかき鳴らしはまるで わたしに言っているようだ、「おいで、踊れ！」

山の愛らしいひと、わたしの心やさしい土地っ子女性は どこを歩いているのだろうか？ きょうわたしはおまえにうたう、おまえの日曜日のサンバを。わたしの小さな鳩よ！

霧のポンチョをまとって おまえは行った、街への道を。わたしのサンバはおまえを待っている、きれいな土地っ子女性。

貧しい者たちの小さなサンバ、溪谷の花、友情の光。おまえの歌声は宝石だ、トゥクマンの日曜日ごと。おいで、踊れ！

*サンビータは、広く愛されている伝統舞曲《サンバ *zamba*》の愛称です。スカーフを振りながら、男女のカップルで踊ります。

6. ラ・アルンギータ *La Arunguita*

伝承曲 編：ビクトーリア・ディアス *Victoria Díaz*

先の『あっちのほうのサンビータ』の作者ヘレーズが加わった民俗芸能団の監督だったアンドレス・チャサレータが採譜編曲・出版して有名にした舞曲です。歌詞は、サンティアゴ地方独自の言語キチュア語（インカ帝国の公用語ケチュア語から分かれたもの）です。題名は女性の名前らしいです。



ラ・アルンギータの踊り
(19世紀末、サンティアゴの風俗)

わたしは息も絶え絶えに生きています。死ぬのは 痛みのせい。1輪のすばらしい花のゆえ わたしの心は受難の苦しみ。

なぜあなたは わたしに言った？「あなたのそばに ずっといます」と。ひとり またひとり 好きになって、あなたはわたしの心を痛める。

あなたの母さん どこに？ 水辺のほうへ行った。あなたの父さんが行ったらほかの人といっしょにいた。わたしのアルンギータ かわいい娘、わたしの愛アルンギータ。

7. 猫さんたちのチャカレーラ *Chacarera de los gatos*

作詞作曲：マリーア・エレナ・ワルシュ *María Elena Walsh*

◆作者は大学生のころ、女性フォルクローレ・デュエットを組んで、ヨーロッパで文化使節として活動。後に子どものための音楽劇・テレビ・シリーズの制作・脚本・作詞作曲で絶大な人気を上げ、超有名人になりました。その後は、現代のメッセージをもったおとなのためのフォルクローレも書きました。

3匹のエlegantなおす猫たち。ステッキに山高帽、手袋。グルグル回りながら、スーツケースを準備し

ていた。
“*miau...miau...miau...miau...*
michi, michi, miau”

それを見たネズミたち全員は
イタズラっぽくたずねた。「猫さ
ま方 どこへ行くの?」「わたし
たちはトウクマーンへ行くんです」
*miau...miau...miau...miau...
michi, michi, miau”*

それというのは 耳寄りな話を
聞いたから。ガト (おす猫) のた
めのコンクールがあるという。3
匹の猫が行くよ、市電でトウクマ
ーンに。

いかにも猫ならではの慎重さで、
トウクマン市の真ん中マテ・デ・
ルナ大通りを渡った。そして頭か
ら飛び込んだ、美のコンクールへ。

.....

でもコンクールは、ガト (踊り
の名) とチャカレーラのだった。
猫たちはサロンから放り出された、

なんの説明もなく。

*“miau...miau...miau...miau...
michi, michi, miau”*

少したって帰ってきた、山高帽
を逆にかぶって。毛にはアザミの
トゲだらけ、しっぽを地面に引き
ずって。

*“miau...miau...miau...miau...
michi, michi, miau”*

ニャーニャーと真実を伝えた、
まわり近所のすべてに——トウク
マーンはきたなくて 悲しい。な
ぜならそこには猫は存在しないか
ら。

ネズミたちはしっかり聴いた。
そしてすぐさま向かった。ネズミ
たちが行くよ、市電でトウクマ
ーンへ。

*市電ではトウクマーンへは行けな
いはずですが……。

《II》

1. 花売りのジューリア Júlia Florista

作詞：レオネール・ヴィラール Leonel Vilar

作曲：ジョアキーン・ピメンテル Joaquim Pimentel

◆ジューリア・フロリーシュタは 20 世紀の初めに実在した
ファドの歌い女で、録音 (ポルトガル・ギターをかき
鳴らしながらうたう) も残っているらしいです。本業が
花売りでした。料亭でのお金持ちのパーティなどに招か
れて、夜中過ぎまでうたい、朝早く河岸の (今日もある)
市場に花を仕入れに来たそうです。

ジューリア・フロリーシュタ、ボヘミアンでフ
ァディシュタだったと語り伝えは言う。彼女はこ
のリスボンで、わたしたちの歌のシンボルだった。



ひときわ目立つ姿、ギターラのひ
びきに乗ってファドを生きた。彼女
は花を売っていた。でも彼女の恋は
決して売らなかった。

足にはサンダル。裏町のならずも
のの空気が 歩くときの動きに。ジ
ューリアが通ってゆくと リスボン
は立ちどまった、彼女のうたうのを
聴くために。

空気には花を売る声、口には 愛

を語る歌。そして胸にかかえたのは
花かごの 粹に動くすがた。

おお ジューリア・フロリーシュタ、
あなたの美しい物語を わたしたち
の記憶のなかに 時が刻みつけた。

おお ジューリア・フロリーシュタ、
あなたの声はこだまする、街を愛す
る人々の夜々に。わたしたちのリス
ボンの ボヘミアンでファディシュ
タの夜々に。

2. わたしの道のバラの花たち As rosas do meu caminho

作詞作曲：アルベルト・ジャネシュ Alberto Janes

◆作者は、1950 年代にファド作者として活動をはじめようとした若者でした。で
も歌もギターもたいへんヘタだったので (それに、曲も変テコでした)、だれにも
相手にされなかったのですが、アマーリアさんが独自の才能を認めて、彼の曲を取
り上げ、みごとにうたって、『それは神様だった Foi Deus』ほか最大級のヒット
曲になりました。この曲は 1959 年のもので、アマーリアさんがうたっても、ヒッ
トはしませんでした。

わたしの道の石たちを バラだと
思ってしまう人は 知らないのだ、
わたしが もらったバラたちの中に
いつも香りを見つけたことを。……
その香りは逃げてゆくとき わたし
にとげを残していった。傷ついたわ
たしの両目からは 血が流れた。

なぜなら香りは 通り過ぎてゆく
もの、つかのまのもの——冷えた灰
の中で わたしたちをかえって寒く
する火のように。

そして とげたちは 人間の魂を
悩ませる。傷の中で、命と同じだけ
ずっと ありつづける。

わたしはむかしのように 大声で

笑えたらいいとおもう——とつても
生き生きした笑い声で 空気のなか
に彫刻のように残るほどに。

それなのに 人生の太陽の上には
雲があつて、その雲たちは動かず、
黒い影たちでいっぱいにする、ある
人たちの人生の光を。

そしてわたしがうたうとき、みん
なに はっきりと見える——わたし
の人生のなかに、復讐を望むひとつ
の夢の美しさを。

でも だれにも ひとつの美しい
夢に命を与えることはできない。そ
れはお城を建てること、すべて空気
でできたお城を。

3. サンバ・デル・ラウレール (ローリエのサンバ)

Zamba del laurel

作詞：アルマンド・テハーダ・ゴメス Armando Tejada Gómez

作曲：クチ・レギサモン Gustavo “Cuchi” Leguizamón

◆アルゼンチンでは、1960年代からフォルクローレに深く根ざした「新しい歌」の動きが、豊かな成果を生みました。そのなかでも最大級の天才たちふたりの合作です。この曲は、詩人（ステージ活動もした）の故郷であるワイン産地クージョ地方の、ロマンティックなセレナータの歌（トナーダと呼ばれます）の空気がいっぱいです。そしてクライマックスでは、作曲家（ピアニスト）の故郷サルタ州のアンデス高原の歌バグワラの世界になります。

「みどり」なるものに別の名前があったとしたら「朝露」と呼ばれるにちがいない。もしも水からローリエに育つことができたとしたら、川の子ども時代に帰ってもいい。

あなたの両目のローリエ色のみどりのなかに 森の神秘が顔をのぞかす。そして命はふたたび あなたの肌の花になる、若い女性と香りのできた太陽の下で。

みどりなるものが あなたの名前を知っていたら、やさしさはわたしを忘れることがないだろうに……なぜなら あなたから来るのだ、純粹で単純に、みどり色が 命の単純

なみどり色のように。

静けさは わたしに呼びかける歌になった——「川のほとりであなたを待っている……」。そしてわたしは知りたい、とあるローリエの香りが あなたの忘却を朝露で満たしたかどうか。

わたしに みどりなるもののなかで 朝をお祝いさせておくれ。なぜなら みどりなるものとともに、わたしは命に帰ってゆくから。

わたしは帰るために死ぬ、ローリエの花の朝露を集めながら。わたしは帰るために死ぬ、ローリエの花のその朝露を集めながら。

4. レハニーア (遠いもの) Lejanía

作詞作曲：エルミーニオ・ヒメネス Herminio Giménez

◆作者はパラグアイ人で、長くアルゼンチンに住んで、歌手・創作活動をしました。この曲は、アルゼンチンで、故郷を思う気持ちをいっぱいこめてつくられました（1948年）。もう少し甘いポルトガル語訳詩により、ブラジルでは『わたしの初めての愛 *Meu primeiro amor*』というタイトルでヒットしました。

パラグアイは、スペイン語と先住民のグワラニー語のバイリンガルの国です（グワラニー語は、パラグアイ、ブラジル南西部、アルゼンチン北東部で公用語です）。きょうは、後半の歌詞は、すべてグワラニー語ヴァージョンを採用いたしました。この言語は、パラグアイのメロディのすべての底に流れています。

わたしの子ども時代の 遠い 初めての愛、あなたにまた会いたい。遠い崇高な愛、青い夢、どこに あなたはいるのか？

遠く取り残されている あの午後の思い出は、あの愛情の午後の思い出は わたしの記憶に飛び込んでくる、野鳩の群れのように。

わたしの魂を燃やす思い出たち——きょう わたしの人生は悲しい。それゆえに わたしは口ずさみながら行く、この悲しい歌をほんとうのグワラニー語で。

あなたにまた会いたい、わたしの愛するひと、どこを歩いているのか？ わたしがあなたと別れてから。

いじめないでください、わたしの乙女、ここへ帰ってきてください、わたしをなぐさめに。

この暗いたそがれ時、わたしがあなたと別れてから わたしはひとりぼっちの 身なしご。小舟をこごように道をさまよう。

あざみが わたしを刺す。わたしはやせ細る、わたしは枯れる。わたしの内臓は燃える、わたしがあなたと別れてから——この暗いたそがれ時に。

5. ファド・タマンキーニャス Fado das Tamanquinas

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボザ João Linhares Barbosa

作曲：カルロシュ・シモンエシュ・ネヴシュ Carlos Simões Neves

◆タマンキーニャス（靴の一種）は、メロディ作曲者（ギター奏者だった）のあだ名です。作詞者はファドの専業作詞家として最高・最大の人でした。もともとは街頭でうたって、自分の歌詞を売り歩き、1930年代からはファドを専門に聴かせるサロン・会館をつくって、ファドのプロ・アーティスト化への道を開き、長くファド専門誌の編集長でした。リスボン名誉市民。

さまざまうたと さまざまのサウダードで この美しいリスボンは生きている。彼女は きちがいじみたことや 良くないこともする。でも 根は純粹で善良、彼女のいろいろな軽はずみな行為の中にも。

中心のシアード街ではブルジョワ女になる。貧しい街の中庭では 裁縫女。料亭ではファドを歌う女。市場では値切り屋の女、そしてタイジュ河が彼女のいいなづけ。

さまざまうたを 呼び売りの声にする。空と月が好き。聖体行列では信仰をもって歩む。カーニバルの街のダンスでは頭がおかしくなる。彼女はさまざまの嫉妬と情熱をもつ。

永い命を！ このきれいなリスボンに！ ほかの町々と違って生きておくれ！ マドラゴア区は青い街。いろいろな欠点といろいろな長所、すべてをこのリスボンはもっている。

6. わたしは死んでいた

Cuidei que tinha morrido

作詞：ペドロ・オーメン・ド・メロ *Pedro Homem de Mello*

作曲：アラン・ウルマン *Alain Oulman*

◆きょう2つめのウルマン作曲。これは現代詩人に作曲しました。この詩人は、ポルトガル北部出身で、その地方の伝統文化・フォルクローレを愛し、歌や踊りのグループをひきいてステージ活動もしていました。

小川に沿って通ったとき——そこでわたしはときどき身を乗り出すのだけれど——だれかがわたしの全身をしっかりと見すえた、すすり泣きのように折れ曲がっているわたしを。

黒いふたつの瞳 あんなに疲れきっていた瞳。わたしの根とおなじ根たち……。わたしの愛よ、あなたがわたしに結びつくとき、もしかしたらその根が見えているのか？ わたしの愛よ、あなたがわたしに結びつくとき。

あの顔にある なんという青白さ、月光のシーツの上で！ まるで日の沈むとき 臨終をむかえてくるしんでいる人のように。

人々は そこで 忠告してくれた、わたしから感覚を捨てなさいと。

でも あとで鏡の中のわたしを見て、わたしは気がついた、わたしは死んでいたのだと！ わたしは気がついた 死んでいたのだと！



アラン・ウルマン（右）の、最後の作品になってしまった曲『孤独という名の村 *Soledad*』を練習しているアマーリアさん（1989年）

7. ロス・マレアードス（酔いどれたち） *Los mareados*

作詞：エンリーケ・カディーカモ *Enrique Cadícamo*

作曲：フワン・カルロス・コビアーン *Juan Carlos Cobián*

◆1922年にブエノスアイレスで上演された劇『麻薬におぼれた男女』の挿入歌です。ただし、あんまり評判になりませんでした。音楽性が豊かすぎて理解されなかったのか？ その20年後、新しく歌詞が付けられ（劇と同じくキャバレーが物語の舞台のようです）、より広く知られ、その後、時がたつほど、ますます愛されるようになりました。今日では、歌手よりミュージシャンのほうが好んで、歌なしでよく演奏されています。

妖しく……燃えているようなあなたを見つけた。あなたは飲んで、美しく、死の影を宿して……そして シャンパンの爆発する音のなかで 狂おしく笑っていた、泣かないために。

あわれみを、あなたを見出したわたしは感じた。なぜなら わたしの目に入ったのだ、あなたの両目が輝くのが、電気の熱をもって…… あなたの美しい両目、わたしがあれほど愛したもの……

今夜、わたしの女友だちよ、アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人々があざ笑っても、みんなが わたしたちを酔っぱらいと呼んでも……

人それぞれに その悩みがある。わたしたちも悩みをもっている。今夜わたしたちは飲むことにしよう。なぜならもうわたしたちは、ふたたび会うことはないのだから。

きょうあなたはわたしの過去に入っていく、わたしの人生の過去に……。3つのものを わたしの傷ついた魂はもっている——愛……くるしみ……痛み……。

きょう あなたは過去に入っていく。そしてきょう わたしたちはわたしたちの道をとろう。わたしたちの愛は どんなに大きかったことだろう！——それなのに……ああ 見てごらん 残ったものを……

今夜は最後までお聴きいただき ありがとうございます。
また お会いできることを楽しみにしております。

選曲・構成：峰 万里恵
プログラム作成：高場 将美